

中国語話者の英語に対する言語態度 —日本語専攻大学院生の事例—

山 口 美知代

1 はじめに

1.1 本論の目的

筆者は研究課題「英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究」の一環として、中国の大学生・大学院生を対象とした言語態度調査を行っており、本論ではその調査の一部について暫定的な結果を報告する¹。

中国での英語話者（英語学習者を含む）は、日本の英語話者（英語学習者を含む）と同じく外国語として英語の話者であり、Kachru（1985）の世界諸英語の分類によるところの拡大円（Expanding Circle）に属する。中国語話者が英語について抱いている言語態度、とりわけ中国の大学生のそれを知ることは、日本の大学英語教育にも有意義だと考える。

言語態度研究の対象となる英語変種は、渡辺（2018:1）が整理したように、20世紀末に内円圏（Inner Circle）から外円圏（Outer Circle）や拡大円圏（Expanding Circle）に広がり、近年ではアジアの訛りのある英語の研究も盛んになった。一方で、アジア訛り同士に絞って、同じ質問フォーマットで行う調査はこれまでにほとんど行われておらず、これが本研究課題「英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究」の目指すところでもある。

また、今回調査を行った中国の大学の大学院で、筆者は2018年夏に一週間の言語態度研究についての集中講義を行い、その二日目にアンケート調査を実施した。アンケート調査実施後に、日本人の英語に対する言語態度調査論文、渡辺（2018）や、映画、ドラマにおける英語を話す日本人の表象についての研究論文、山口（2018a）、山口（2018b）などを紹介した。そのときには、受講生にも自身の考えを日本語で記してもらった。その一部を本論第3節で紹介する。

1.2 被験者と調査方法

具体的には中国の外国語大学日本語専攻大学院生25名を対象にした調査結果について報告する。同じ大学の英語専攻の大学生・大学院生についても同じ調査を英語で行っており、最終的に約150名の参加者を期待している。

調査方法は、無記名アンケートによる直接法アプローチをとった。使用したのは、共同研究者

である渡辺（2018）で作成された言語態度アンケートを、中国語話者用に一部修正したもので、本論巻末の付録に掲載している。質問用紙は日本語で記され、調査にあたった筆者が質問項目および回答選択肢について不明箇所がないか説明した。

英語変種についての音声サンプルを聞いたうえで判断する間接法（indirect method）ではなく、音声サンプルは聞かずに英語変種についてのこれまでの知識、経験をもとに判断する直接法（direct method）である。直接法は問題点として、被験者の反応が「純粹に発音や用法に対するものか、特定の変種名から連想する国家や文化に対するものなのかを峻別することは難しい」があるが、本研究ではそうした連想、イメージに基づく言語イデオロギーにかかわる要素も考察の対象とするので、直接法を採用した（渡辺 2018:2-3）。

質問の狙いを、渡辺（2018:5-7）に基づいて述べる。質問1では、好ましい英語の地域変種を挙げてもらう。質問2は、質問1で尋ねた好きな変種の上位2位について理由を尋ねる。質問3は発音に対する態度を問う。そこで母語話者の発音習得を目標とした回答者には、質問4でその理由を尋ねる。質問5で英語力を高めたい理由を尋ねる。質問6は、渡辺（2018）では「日本人英語」の発音について尋ねているが、中国語話者を対象とした本調査では「中国人英語」の発音について、被験者が考える顕著な特徴を2つ答えてもらう。質問7は非内円圏変種への熟知度の確認である。特にアジアの変種について、日本語訛りの英語、中国語訛りの英語、朝鮮語訛りの英語、フィリピン英語を挙げた。「～語訛り」という表現をするのは、文法や語彙特徴ではなく発音特徴を扱っているためで、Japanese accented English などへの対応表現を意図している。質問8は、東アジアの3か国と、フィリピン、それからヨーロッパの計5種の訛りに対する反応を尋ねている。(1)、(2)は連帯項目（solidarity traits）、(3)は能力項目（competence traits）、(4)、(5)が地位項目（status traits）に相当する。

2 調査結果と考察

質問項目順に、調査結果とそれについての考察を記す。一部の項目については、渡辺（2018）による日本人大学生を対象とした調査結果および考察との比較を試みる。調査対象人数の少ないパイロットスタディの段階なので、あくまで暫定的な結果および考察になるが、現時点で顕著な項目についてとりあげる。

2.1 好きな英語の変種

「どの国・地域で話されている英語が好きですか」という問いに対して1位の結果、および、上位2位を合わせた結果は以下のとおりである。

表 1：好きな英語の変種 (N=25、数値は人数)

1 位に選んだ変種	イギリス 15、アメリカ 9、中国 1
1 位または 2 位選んだ変種	イギリス 22、アメリカ 21、中国 3、カナダ 2、フィリピン 1、北欧 1

上位 1 位ではイギリスが多いが、上位 2 位となると、ほとんどの回答者がイギリスかアメリカ、または両方を選んでいることがわかる。中国という回答が 3 人ある。

総数が多く 25 名なので決定的なことはわからないが、1 位はイギリス英語が多い。また、上位 2 位を見たときには、イギリス、アメリカがほぼ同数で、内円圏の英語を志向する傾向が強い。

2.2 自分の英語の発音に関して

この問いは自分の英語の発音に関してどう思うか一つ選ぶことになっているが、複数選択肢を選んだものがあり、有効回答数は 24 である。

表 2：自分の英語の発音に関してどう思うか (N=24、1 つ選択、数値は人数)

中国語訛りをなくして、ネイティブスピーカーの発音に近づきたいと思う	13
中国語訛りがあっても、相手が聞き難くなければ問題ないと思う	10
中国語訛りは私のアイデンティティであり、聞き難くても尊重してほしいと思う	1

なお「アイデンティティである」を選んだ回答者は、好きな英語としてはアメリカ、イギリスを選んでおり、中国を選んでいるわけではない。

「ネイティブスピーカーの発音に近づきたい」を選んだ 13 名についてその理由を尋ねる問 4 では、「目標に向かって努力することが大切」が 9 名で、「クールに聞こえる」が 4 名であった。日本の大学生を対象とした渡辺 (2018:8) の調査では、質問 3 で「ネイティブスピーカーの発音に近づきたい」を選んだ 22 名について、理由を尋ねた質問 3 では、「目標に向かって努力することが大切」と「クールに聞こえる」は同数一位の 9 名ずつであった。

2.3 英語力を高めたい理由

英語力を高めたい理由については、1 つ選択という質問であったが、2 つ以上答えた人があったため、総数が 22 となっている。有効回答数の半数以上（被験者 25 名のなかでも半数以上）が「就職・収入に有利な資格として」を選んだ。

表3：英語力を高めたい理由（N=22、1つ選択、数値は人数）

就職・収入に有利な資格として	13
ビジネス等での交渉で優位に立つため	4
翻訳に頼らず海外の文化を知るため	4
母語を異にする友人との懇親・意思疎通	1

渡辺（2018）の調査では、最大の19票（40％）を得たのが「母語を異にする友人との懇親・意思疎通」で、その分析として「大学生がビジネスより友人関係を重く見るのは自然なことかもしれない」（渡辺2018:8）と説明されている。今回の調査で、懇親を挙げた人が1名だけであったのにはいくつかの理由が考えられよう。ひとつは、被験者がみな修士課程2年の大学院生で、社会人経験を経て大学院に入った人もおり、大学学部生よりも就職やビジネスについて身近に感じているということが考えられる。また、日本語専攻大学院生ということで、交流の機会が多いのは、英語話者よりも日本語話者ということもあるかもしれない。（これに関しては第3節でもう一度触れる）。そしてもちろん、日本と中国の違いに原因を求めることもできるであろう。この点については、英語専攻の学部生、院生を対象にした調査結果を踏まえて再考したい。

2.4 「中国人英語」の発音特徴について

中国人英語の発音特徴についての中国語母語話者の認識を問うのが質問6である。今回、この設問は、日本人学習者用に作られた項目をそのまま使ったのだが、中国人英語話者に特徴的なVとWの混乱を選択肢に入れることが望ましかった。

いずれにしても、イントネーションやリズム（強弱）といった、超音節的要素を中国語母語話者の英語の発音特徴と捉える傾向が大きいことがわかる。

表4：「中国人英語」の発音の顕著な特徴は何か（N=25、2つ選択、数値は人数）

イントネーションが違う	16
リズム（強弱）のない発音	12
SとTHの混乱（例 sink/think）	8
英語の母音を正確に区別できない	6
LとRの混乱（例 light/right）	3
その他	2
FとHの混乱（例 fall/hall）	1

その他を選んだ二人は「VとWの混乱、veryの[v]を[w]と発音する」「とにかくかたい」と記述している。前者のVとWの混乱は、前述のように中国語母語話者の英語によく聞かれる特

徴であるので、おそらく特記しなかった被験者のなかにも選択肢にあればこれを選ぶ人がいると考えられる。

2.5 各変種に対する言語態度

表 5: 中国人大学生の 5 点尺度法による言語態度結果 (N=25、5 = 強くそう思う、1 = 思わない)

項目	日本語訛りの英語	中国語訛りの英語	朝鮮語訛りの英語	フィリピン の英語	ヨーロッパ の英語
(1) 心地よい響き	2.63	2.88	2.21	2.33	2.96
(2) 親しみ	2.79	3.54	2.17	2.13	2.58
(3) 英語能力	2.29	2.92	2.08	2.42	3.67
(4) 知性・教養	3.00	2.83	2.67	2.21	3.08
(5) 高額所得	2.79	2.88	2.54	2.29	2.67

「心地よい響き」では、ヨーロッパの英語が 2.96 と一番高い。次いで中国語訛りの英語が 2.88 と僅差である。日本語訛りの英語がそれに続く。「親しみ」では、中国語訛りの英語が 3.54 と群を抜いて高い。日本語訛りの英語が続くのは、回答者が日本語学部大学院に在籍しており、日本訪問経験や日本人との交流の機会、日本のドラマや映画に触れる機会が多いことも関係しているだろう。ヨーロッパの英語への親しみは、韓国、フィリピンの英語への親しみより高い。

「英語能力」では、ヨーロッパの英語が 3.67 と群を抜いて高い。アジアの変種のなかでは、中国語訛りの英語が 2.92 と高い。フィリピンの英語がそれに続いており、日本、韓国の英語への評価は低い。

「知性・教養」については、ヨーロッパの英語と日本の英語がほぼ同じ値である。日本語訛りの英語への評価が高いのは、回答者が日本語専攻であることも関係するかもしれない。これについても、英語専攻の学部生、大学院生を対象とした調査結果と比較したい。「高額所得」については、中国語訛りの英語への評価が一番高く、日本語訛りの英語が続く。

ここで質問 8 の言語態度に関する五項目について、先行研究が明らかにしている一般的傾向、および渡辺 (2018) の結果との比較の観点から述べておきたい。

まず、「心地よさ」「親しみ」といった連帯項目について、先行研究では、自分と同じ訛りに対するグループ内忠誠 (in-group loyalty) が顕著であると、言語態度研究萌芽期の 1970 年代にすでに指摘されている (渡辺 2018:7)。この一般的傾向に対して、日本人大学生を対象とした Watanabe (2018) は、「心地よさ」について異なる傾向を示した。Watanabe (2018) は渡辺 (2018) を発展させて、調査対象を 200 人へと増やした調査である。Watanabe (2018) の調査では、「心地よさ」について、日本語訛りの英語が 2.02 と最も低く、ヨーロッパの英語が 3.18 と最も高かつ

たのである。一方、Watanabe(2018)でも「親しみ」については日本語訛りの英語が3.33と高くヨーロッパの英語2.72、フィリピンの英語2.40が続き、中国語訛りの英語は2.01と最も低かった。

これ点について中国の大学院生を対象とした今回の調査では、「心地よさ」についてヨーロッパの英語に対して2.96と最高値が出ているものの、自国語訛りの英語、つまり中国語訛りの英語にも2.88と同じような数値という結果になっている。また、日本語訛りの英語への評価も2.63であり、フィリピンの英語の2.33や朝鮮語訛りの英語の2.21に比べると高い。これは被験者が日本語専攻の大学院生であることとも関連しているかもしれない。この点については、英語専攻の学生、院生を対象とした調査の結果と比べたい。

「親しみ」について中国語訛りの英語に対して3.54と高い値が出ているのは、自分と同じ訛りに対するグループ内忠誠が顕著であるという先行研究での指摘や、Watanabe(2018)での日本人大学生の調査結果と同じである。一方で、今回の調査では日本語訛りの英語に対する「親しみ」が2.79であり、ヨーロッパの英語に対する2.58よりも高いことは、Watanabe(2018)で日本人大学生が日本語訛りの英語に対して3.33、ヨーロッパの英語に対して2.72を与えたのに対して中国語訛りの英語には2.01と一番低い値を示したことと対照的である。これは今回の中国人被験者が日本語専攻の大学院生であることが影響を与えていると考えられる。今回の被験者は、日本語話者との交流経験が多く、また日本のテレビドラマや映画などに触れる機会も多いので、日本人の話す英語に触れる機会も多いと考えられるからである。

表6：日本人大学生の5点尺度法による言語態度結果 Watanabe (2018) (N=200、5 = 強く思う、1 = 思わない)

項目	日本	中国	韓国	フィリピン	ヨーロッパ
(1) 心地よい響き	2.02	2.03	2.20	2.35	3.18
(2) 親しみ	3.33	2.01	2.27	2.40	2.72
(3) 英語能力	1.76	2.58	2.51	2.75	3.78
(4) 知性・教養	2.13	2.58	2.38	2.27	3.49
(5) 高額所得	1.95	2.73	2.42	2.09	3.15

3 自由記述から

言語態度調査を実施した大学院生25名とともに授業で、渡辺(2018)、「日本語訛りの英語に対する言語態度—先行研究と進行中プロジェクト—」を読んだ。その論文についての受講生の自由作文のなかから、特徴的なものをいくつか紹介する。² また、授業のなかでは英語を話す日本人の表象についての拙論、山口(2018a)、(2018b)、(2015)なども紹介し、それに対する考え

を日本作文として記してもらった。とくに山口（2018 a）で扱った映画『シン・ゴジラ』の英語使用についての考えが表れている箇所をいくつか紹介する。なお作文は提出後、語法、文法につき添削したものを再提出したもので、匿名で引用紹介する許可を得ている。

3.1 言語態度調査に関する自由記述

集中講義期間の2日目にアンケート調査を実施し、渡辺（2018）の紹介はそのあとに行った。この論文がアンケート調査結果に影響を与えることを避けるためである。

「被験者たちが日本人なのに、日本人の英語につけた点数はあまり高くなかった。客観的な角度からアンケートをしたことはわかるが、そんな低い点数を見ると、ちょっと悲しいと思う」

「帝国が植民地に言語、文化などの影響をもたらし、植民地が独立しても、こういう影響も消えず、引きつづき残る。そのような影響には言語も含まれるから、英語が今共通語になったのではないか。また、英語だけではなく、ポストコロニアルの今でも欧米の地位が一番高いという考えを持っている人は多いと思う」

「5点尺度法による言語態度調査結果をみたあと、ちょっとびっくりした。同じく訛りがついた英語なのに、国別によって違う印象を与えるのはどういうことだろう。母語話者のほうが上手、あるいは、非母語話者の英語力が低いという考えは正しいのか。確かに、非母語話者の発音は、母語話者のように流暢ではないが、母語話者の文法は案外に弱い。英語能力は四技能から成り立つものなので、文法と単語の習得も重要な一環ではないか。

大学2年生の時、初めて母語話者の文法が思うより弱いという現実を知った。うちの先生が試験に出たある文法問題をめぐって、アメリカ人の先生に聞いてみたら、母語話者のアメリカ人は率直に自分の文法が弱いと返事をした。なるほど、生まれてからそのまま英語に慣れてきたので、自然に英語を習得するのだ。だから、文法のことをあまり注意しなくても、大体は正しいのだ」

「アンケート調査では、「知性・教養」と「高額所得」という項目は、英語レベルだけでなく、英語を話す各国の社会的状況を背景知識として知らないと、当て推量でしか選択できない。

そして、被験者は多分イギリス英語やアメリカ英語が正統である意識に支配されながら、日本英語や韓国英語をそれと比べて出した結果ではないかと疑問を持っている。

ヨーロッパの英語が能力項目と連帯項目で圧倒的に高い評価とされたのは、西欧各国はイギリスに近いから、ヨーロッパの英語が似ているところが多いとされるので、高い評価をもらったのではないか。日本や韓国の英語は母語も英語と全く違うので、多少とも母語から影響を受けたため、よくないなあと思われるかもしれない」

3.2 映画『シン・ゴジラ』の英語に関する自由記述

集中講義のなかで、映画『シン・ゴジラ』をDVDで一部見ながら、英語使用について言語態度の視点から論じた山口（2018a）を紹介した。この論考では、『シン・ゴジラ』で日系アメリカ人の大統領特使カヨコ・アン・パターソン役を演じた石原さとみの英語のせりふについて、（1）コードスイッチングの観点からストーリーの展開にマッチした使用がなされていること、（2）日本ではインターネット上で批判的なコメントも見られたが、映画評を読むと、そこにおもしろさを見出す視点が少なくないこと、（3）映画レビューサイト RottenTomatoes の英文レビューでは、厳しい評価を示すものが多かったこと、の3点を論じた。授業では、『シン・ゴジラ』をDVDで見ながら、主として登場人物の英語使用、日本語とのコードスイッチングについて解説した。その授業のあとで、自由に記述してもらった作文のなかから、一部を紹介する。パターソン特使を演じた石原さとみの英語については、上手だという見方と上手でないという見方は両方あった。（下線は強調のため、引用者が付したものである）

「映画評のこだわり

『シン・ゴジラ』の映画評は主にパターソン特使の英語を批判する一方で、私はそれを納得できない。映画というものは、語学ではないのだ。一般民衆にとって、一番興味深いのは映画のストーリーだろう。また、好きな題材や俳優があるから、映画館に見に行くのだ。正直に言うと、非母語話者の観客にとって、英語の流暢さは本当はどうでもいいのだ。なぜなら、俳優の英語はいくらネイティブ・スピーカーのように聞こえても、英語に慣れない人は何もわからないだろう。肝心なのは字幕ではないか。非母語話者に対する一番わかりやすい言語は母語だ。つまり字幕で外国語の意思を伝えるのだ」

「台詞一日英コードスイッチングの考え

今日は『シン・ゴジラ』というドラマを見て、パターソン特使の台詞に日英コードスイッチングがあることが分かった。山口（2018a）は日本語と英語の間のコードスイッチングの様子が変わることで、二人の力関係、距離がかわったこと、パターソンが一方的に話を進めているのではないことが示唆されることを指摘した。それが私に以下のことを思い出せた。日本語の敬語はレベルシフトによって、二人の仲、心理距離が近くなったり、或いは遠くなったりする。それと同時に、敬語のレベルシフトの時機は二人が話す前に相談して決めるわけではない。二人の身分、関係、話す内容、相手の反応などによって敬語のレベルシフトは自然に発生する。それはパターソンの台詞の日英コードスイッチングと同じ機能だと思う。しかし、パターソンの台詞に流暢な英語が入っても、あるところが速すぎて、格好いいと思うけれど、聞き取りにくい。それが俳優さんの評判に影響があると思う。」

「俳優の外国語について

『シン・ゴジラ』では、石原さとみが英語を話すアメリカ人を演じた。彼女の英語について批判的な感想を持つ人がいる。これによって、長沢まさみが主演である『コンフィデンス・マン』というドラマを思い出した。その中では、長沢まさみが中国の商人を演じていたが、彼女の中国語の発音も気になる。そのため、なぜ映画の中で俳優の外国語のせりふをネイティブスピーカーで吹き替えることができないのかという疑問が出てきた。映画は文化の伝播メディアとして、自国の文化を広める役割を担っているだけではなく、外国の文化を正しく伝えるべきである。その中には外国語の発音なども含まれている。俳優が外国語をうまく話せないのは当然だが、少なくとも、母語話者に発音を直されるべきだ。俳優の発音を直せない場合だったら、ネイティブスピーカーで吹き替えるのもいい方法だろうと思う」

「英語力を批判する立場について

私は映画が好きなので、映画サイトで見た映画をマークしたり、一言のコメントを書き込んだりする。2016年私も『シン・ゴジラ』を見た。今回を機として、あの時の記録を振り返った。「石原さとみがうるさい、ゴジラの Ver.1 は Ver.2 よりかわいい」と書き込んだ。今回、アメリカの評論家のコメントを読んで、すごく同感だと感じた。しかし、これは英語力が低い石原さとみのせいではなく、ただ「英語母語話者+エリート」というキャラ設定と合わないだけだ。英語の先生を演じた時も、ちょっと疑問に思った。しかし、英語堪能のキャラではなかったら、英語力が低くても、別に構わない。

しかし、日本の批判は違う、英語力自体を批判していると思う。国際的に関わったら、さらに厳しくなると思う。中国も同じで、国際ブランドのCMに出てくる中国女優の英語発音が炎上したり、中国携帯会社の社長の外国演説（英語で）を馬鹿にしたり、もじる動画も作られた。もし、『シン・ゴジラ』が東宝ではなく、ハリウッド映画だったら、石原さとみが一層非難を浴びていると思う。なぜ、中国と日本は国際舞台で活躍している人たちの英語力にそんなに厳しいのか。やはり、「メンツ」というのをすごく重視しているのではないかと思う。」

「言語と尊重の関係

石原さとみが『シン・ゴジラ』の中で、滑らかな英語で話すことだけで、「この人は絶対に重要な人物」だと印象付けられる。『マダム・イン・ニューヨーク』のシャシは英語が話せないだけで、娘の学校に行くときは、すごく不安に思い、「英語が話せない私が悪い」という態度で先生と話した。その反面、先生のヒンディー語は上手ではないが、全然自分が悪いと思っていない。英語とヒンディー語両方ともインドの公用語なのに、使っているひとにこんなに影響を与えられる。やはり、言語がすでに、コミュニケーション機能以外に、人を評価する基準にもなっている。

なぜ言語で人を判断できるのか、なぜ英語がその判断基準の一番上に立っているのか。母語として英語を話す国（英、米、豪、加等）が大体先進国であるから、英語ができる人も他の人より「先進」ではないかと人々が考えていると思う。しかし、こうした理由で、人を差別するのはどうだ

ろう。シャシがアメリカでコーヒーを買う時の場面を思い出すと、外国語を勉強しているが全然上手でない私もちょっと悲しいと感じた」

4 むすび

本論では、中国の大学の日本語専攻の大学院生を対象に行った英語に対する言語態度アンケート調査について、報告した。また、アンケート回答者たちが、英語について述べた作文の一部を紹介した。調査については、今回分析の対象とした被験者人数が25名と少ないので、すでに回答済みの120余名の結果と合わせてさらに分析を進めたい。また、自由記述についても、より詳しく検討したい。

註

¹ 本論は科研費研究課題「英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究—映像メディア分析と教育的活用—」基盤研究(c)研究課題番号16K02885(2016－2018年度、代表山口美知代)の研究成果の一部である。

参考文献

Kachru, Braj (1985) Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H. G. Widdowson (Eds.), *English in the world: Teaching and learning the language and literatures* (pp.11-30). Cambridge: Cambridge University Press.

渡辺宥泰 (2018) 「日本語訛りの英語に対する言語態度—先行研究と進行中プロジェクト—」『英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究—映像メディア分析と教育的活用 2017年度研究成果報告書』 pp.1-19

Watanabe, Yutai (2018) Japanese Ideologies towards L2-accented English: A Case Study in EMI Settings. in Symposium "Outcomes and Implications of an EMI Programme: Accents, Learning Strategies and Career Prospects," *JAFEE Conference, December 2018 Proceedings*.

山口美知代編 (2015) 『科研費研究課題 世界諸英語に関する理解を深めるための映画英語教育』.

山口美知代 (2018a) 「『シン・ゴジラ』の英語—日本人が演じるパターソン特使への反応—」『英語をめぐる言語態度の東アジア比較研究—映像メディア分析と教育的活用 2017年度研究成果報告書』 pp.40-61.

山口美知代 (2018b) 「連続テレビ小説『あさが来た』の英語」『コルヌコピア』(京都府立大学英文学会) 第28号 pp.47-64.

付録

言語態度アンケート

1. どの国・地域で話されている英語が好きですか。リストの中から好きな順に最大5つまで記号で回答ください。(1) [], (2) [], (3) [], (4) [], (5) []

(A) アメリカ (B) カナダ (C) イギリス (E) オーストラリア (F) ニュージーランド
(G) インド (H) シンガポール (I) フィリピン (J) 日本 (K) 韓国 (L) 中国
(M) ロシア (N) ドイツ (O) フランス (P) 北欧地域 (Q) 東欧地域 (R) 南欧地域
(S) カリブ諸国 (T) アフリカ(南アフリカを除く) (X) その他の国・地域 []

2. 上記で選ばれた英語(1),(2)について,好きな理由をチェックしてください(いくつでも回答可)。

理由	(1)	(2)
学校の授業や教材でなじみ深いので		
国際機関やビジネスで広く使われているので		
家族や友人の発音		
映画や音楽でなじみ深いので		
教養や社会的地位の高さを感じるので		

3. 自分の英語の発音に関して, あなたの意見にチェックを入れてください (ひとつ回答)。

- (A) 自分の発音はネイティブ・スピーカー (NS) と (ほぼ) 同じと思う ☐
 (B) 中国語訛りをなくして, NS の発音に近づきたいと思う ☐
 (C) 中国語訛りがあっても, 相手が聞き難くなければ問題ないと思う ☐
 (D) 中国語訛りは私のアイデンティティであり, 聞き難くても尊重してほしい ☐

4. 上記の質問で B と回答した方へ: それはなぜですか (ひとつ回答)。

- (1) 中国 (東アジア) 出身であると聞き手に思われたくない ☐
 (2) 外国語訛りの英語では, 教養や社会的地位が低いと思われそうである ☐
 (3) 目標 (NS の発音) に向かって努力することが大切である ☐
 (4) 特に大きな理由はないが, NS の発音は 'cool' に聞こえる ☐
 (5) その他 ☐

5. あなたが英語力を高めたいと思う主な理由は何ですか（ひとつ回答）。

- (1) 就職・収入に有利な資格として ☐
- (2) 海外での生活に必要となるため ☐
- (3) ビジネス等の交渉で優位に立つため ☐
- (4) 世界に自分の意見を発信するため ☐
- (5) 翻訳に頼らず海外の文化を知るため ☐
- (6) 母語を異にする友人との懇親・意思疎通 ☐
- (7) 英語が堪能だと注目されるから ☐
- (8) 英語力を高めることには充実感がある ☐

6. 「中国人英語」の発音について、顕著な特徴は何だと思われますか（必ず2つ回答）。

- (1) リズム（強弱）のない発音 ☐
- (2) イントネーションが違う ☐
- (3) 英語の母音を正確に区別できない ☐
- (4) S と Th の混乱（例：sink/think） ☐
- (5) L と R の混乱（例：light/ right） ☐
- (6) F と H の混乱（例：fall/hall） ☐
- (7) その他（ ） ☐

7. 以下の英語の発音をどの程度耳にしたことがありますか。

種類	数回	頻繁	(ほぼ) 皆無
(A) 日本語話者の英語（日本語訛り）			
(B) 中国語話者の英語（中国語訛り）			
(C) 朝鮮語話者の英語（朝鮮語訛り）			
(D) フィリピンの英語			
(E) （イギリス・アイルランドを除く）ヨーロッパの英語			
(F) インド・パキスタン・バングラデシュ等の英語			
(G) 中南米の英語（スペイン語・ポルトガル語訛り）			

8. 上記の質問で英語 (A) - (E) についてお聞きます。

8.1 日本語訛りの英語に対する印象として、相応しい位置のマス目にチェックを入れてください。

	強く思う ←————→ 思わない				
(1) 心地よく響く					
(2) 親しみを感じる					
(3) 英語能力が高そう					
(4) 知性・教養が高そう					
(5) 高額所得者のイメージ					

表 8.2-8.5 省略

(2018 年 10 月 1 日受理)

(やまぐち みちよ 文学部欧米言語文化学科教授)

